

第3回 駒場祭オルガン演奏会



平成21年11月23日 9:00開演



ご挨拶

皆様、おはようございます。本日はお忙しい中、朝早くからお越し下さり、誠にありがとうございます。我々一同、日頃の練習の成果を十分に発揮できるよう、張り切って演奏いたしますので、最後までお付き合い下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

駒場祭演奏会も、今回で3回目を迎えました。最初に「おはようございます」という挨拶で始まる演奏会というのはなかなか珍しいものですが、それも連続して3回となると、恒例行事になって来ていると謂えましょう。晩秋の早朝、まだ冷たい空気の中でパイプオルガンの演奏会を催すことには様々な問題が伴いますが、我々の拙い演奏を聴くためにはるばるいらして下さる皆様の御厚意が大きな励みとなり、今まで続けて来ることができました。重ねて御礼申し上げます。

さて、今回の演奏会では、前回にも増して演奏される曲目が多様となり、バッハ、メンデルスゾーン等の定番の他に、プレトリウス、ガーシュイン、更には21世紀のポップスまで登場します。また、オルガンによる演奏でベートーヴェンの曲を聴くという機会は意外に少ないのですが、今回はなんとドイツ音楽の所謂「3B」(バッハ、ベートーヴェン、ブラームス)が勢揃いするという豪華な布陣となっております。

とにかく自分の好きな曲を弾きたい、という、他ならぬ我々自身の欲求に素直に従った結果の選曲であります。うまく弾けるように、皆様にお聴かせできるものになるように、日々鍛錬し、様々な工夫を編み出して参りました。今日の演奏が何とか成功した際には賞賛の拍手を、もしも失敗した時には励ましの拍手を下さるよう、何卒よろしくお願い致します。ともあれ、我々の試みによって、皆様に楽しいひとときを過ごして頂ければ幸いです。

最後になりましたが、我々同好会が順調に、そして自由に活動を続け、このように発表の機会を設けることができたのも、オルガン委員会の先生方を始めとする様々な方々の御厚意と格別の御計らいがあつてこそのことです。この場を借りて改めて感謝の意を表したいと思います。

それでは皆様、どうぞごゆっくりお楽しみ下さい。

2009年11月23日　オルガン同好会一同

Contemporary

M. ナイマン Michael Nyman (b. 1944)

「羊飼いにまかせとけ」

“Chasing Sheep is Best Left to Shepherds”

Organ : 榊原 直樹 Sakakibara Naoki

Baroque

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750)

フランス組曲第4番 変ホ長調 より アルマンド

Französische Suite No. 4 Es-dur BWV 815 – Allemande

Organ : 高橋 彩 Takahashi Aya

Romantic

J. ブラームス Johannes Brahms (1833-1897)

オルガンのための11のコラール前奏曲 より 第8曲

Elf Choralvorspiele für Orgel op. 122 – No.8 “Es ist ein Ros' entsprungen”

Organ : 高橋 彩 Takahashi Aya

Baroque

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach

「主よ人の望みの喜びよ」

“Jesu, Joy of Man's Desiring”

Organ : 芝原 俊樹* Shibahara Toshiki

Modern

G. ガーシュウィン George Gershwin (1898-1937)

歌劇「ポーギーとベス」 より 「ベス、お前はおれのもの」

Porgy and Bess – “Bess, You Is My Woman Now”

Organ : 貝田 龍太 Kaida Ryûta

Romantic

J. L. F. メンデルスゾーン B. Jakob Ludwig Felix Mendelssohn Bartholdy (1809-1847)

6つのオルガン・ソナタ より オルガン・ソナタ第4番 第4楽章

Sechs Sonaten für Orgel op. 65 – Sonate für Orgel No.4

– IV. Allegro maestoso e vivace

Organ : 榊原 直樹 Sakakibara Naoki

* オルガン演奏会初参加

Renaissance – Baroque

M. プレトリウス Michael Praetorius (1571-1621)

舞曲集「テルプシコーレ」より XXXII. La Bourrée

Terpsichore – XXXII. La Bourrée

Organ : 金久保 祐介* Kanakubo Yûsuke

Contemporary (21st c.)

ryo

メルト

Organ : 金久保 祐介* Kanakubo Yûsuke

Classical

L. v. ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827)

ピアノソナタ第8番 ハ短調 「悲愴」 第2楽章

Klaviersonate Nr. 8 in c-Moll op.13 "Grande Sonate pathétique"

– II. Adagio cantabile

Organ : 丸山 愛葉* Maruyama Yasuha

Baroque

J. S. バッハ Johann Sebastian Bach

前奏曲とフーガ イ短調

Präludium und Fuge in a-moll BWV543

Organ : 平澤 歩 Hirasawa Ayumu

Romantic – Modern

L. V. J. ヴィエルヌ Louis Victor Jules Vierne (1870-1937)

オルガン交響曲第1番 ニ短調 より 第6楽章「フィナーレ」

Symphonie pour orgue n° 1 op. 14 en ré mineur – VI. Final

Organ : 貝田 龍太 Kaida Ryûta

曲目紹介

フランス組曲第4番 変ホ長調 より アルマンド
オルガンのための11のコーラル前奏曲 より 第8曲

バッハのフランス組曲の作曲年代ははっきりしていませんが、バッハが最初の妻と死別後、2度目の妻アンナ・マグダレーナと1721年に結婚し、彼女に最初に贈った曲集「クラヴィーア小曲集」(1722年)にこのフランス組曲の第1～5番の5曲が含まれていることから、1722年頃と推定されています。

第4番はクーラント、サラバンド、ジグといった7曲の舞曲で構成されていますが、その中でもアルマンドは1曲目、フランス語で「ドイツ風の」という意味の舞曲です。感情的にならずに淡々と進むこの曲をオルガンで奏でると、クラヴィーアで弾くのはまた異なった趣を感じさせてくれます。

一方、「オルガンのための11のコーラル前奏曲」は1896年に作曲されたとされ、ブラームス最晩年の作品です。一般に暗い、渋いと評されるブラームスの楽曲ですが、重厚な響きの中にも温かみが含まれているように感じられます。

これら一連のコーラル前奏曲は、定旋律と呼ばれる古くから伝わる賛美歌をベースに、装飾を施したものと言われています。今回演奏するのは曲集の8曲目ですが、日本語で「ひととの薔薇生いいでぬ」という意味で、ドイツの古いクリスマスソングがベースになっているそうです。一か月ほど早いですが、明るい

「羊飼いにまかせとけ」

イギリスのミニマル・ミュージックの大家にして現役の作曲家、マイケル・ナイマン(1944～)の曲です。ミニマル・ミュージックというのは現代音楽の大きな潮流のひとつで、音の動きを最小限に抑え、パターン化された音型を反復させる音楽と言われています。いわゆる難解なイメージの現代音楽と違って聴きやすい曲が多いのも特徴です。さて、ミニマル・ミュージックの代表的な作曲家であるナイマンはほかの多くの現代音楽の作曲家と同様、いわゆる芸術音楽だけではなく、映画音楽も数多く手掛けています。カンヌ国際映画祭でパルム・ドールを受賞した『ピアノ・レッスン』もナイマンの手によるものです。しかしナイマンが作曲した映画の中でも、もっとも重要なのはやはりイギリスの鬼才監督ピーター・グリーンナウェイの作品群でしょう。グリーンナウェイの作品は術学的であり、また時におどろおどろしくも美しい映像で有名で、根強い人気を誇っています。もちろん、私も大好きな映画監督です。

さて、今回演奏する曲はグリーンナウェイの映画『英国式庭園殺人事件』から、『羊飼いにまかせとけ』です。軽快で楽しげであり、それと同時にオルガンの豊富な音色を存分に生かせる曲であると言えるでしょう。

ながらも荘厳なクリスマスの雰囲気を感じて頂ければ、と思います。

「主よ人の望みの喜びよ」

この「主よ人の望みの喜びよ」はもともとオーケストラを伴った合唱楽章として作曲されました。バッハは若い頃から教会の毎週の礼拝のために教会のカンタータなどの声楽作品を作曲し、そして演奏するという仕事をしてきました。そして、「主よ人の望みの喜びよ」が含まれる「カンタータ第147番『心と口と行いと生活で』」は1723年7月2日の礼拝のために書かれました。このカンタータが初演されたのは、処女懐胎を知らされたマリアが親戚のエリザベトを訪ねたことを記念する「マリア訪問の日」といわれる喜ばしい雰囲気に満ちた祝日でした。

オーケストラの弦にあたる特徴的な3連符のモチーフが最後まで続き、それとは対照的な長い音価の厳粛なコラール旋律が加わり不思議な一体感を生み出しています。教会でカンタータを聞いているような雰囲気を味わっていただけるのではないかと思います。



6つのオルガン・ソナタ より オルガン・ソナタ 4番 第4楽章

今年生誕200周年を迎えたドイツの作曲家、フェリックス・メンデルスゾーン作品です。メンデルスゾーンは教会でオルガニストを務めていたという経歴からもわかるとおり、オルガンにゆかりの深い作曲家で、数多くのオルガン曲を残しています。オルガン曲の大家と言えば、まずなんといってもJ. S. バッハを思い浮かべるでしょうが、19世紀、メンデルスゾーンが活躍していた時代にはバッハの音楽は古臭いものとみなされていました。しかしそんな中、メンデルスゾーンはバッハの作品を深く研究し、傑作『マタイ受難曲』の復活再演も実現させます。そんなメンデルスゾーンですから、当然一連のオルガン作品には深いバッハ研究の成果がにじみ出ていると言えるでしょう。そのオルガン曲の中でも、とりわけ有名なのが今回演奏する6つのオルガン・ソナタであり、なかでも第4番は傑作と名高い作品です。今回演奏する第4楽章は最終楽章ということもあり、演奏速度も速く、気分はいやがおうにも高揚してしまうような曲です。これぞ正統派オルガン曲、と言いたくなるような壮麗さと華やかさが何よりの魅力といえるでしょう。

舞曲集「テルプシコーレ」 より XXXII. La Bourrée

ドイツの作曲家で、オルガニストで音楽理論家のミヒャエル・プレトリウスさんが作ったこの「ブーレ」という曲。今回の演奏会の中でもとくに古いこの曲は主として教会音楽に力を注いだプレトリウスさんが残した唯一の世俗曲集「テルプシコーレ舞曲集」(1621年に初めて出版された)のうちの一曲です。曲の感じが変化した後の、きびきびとした格好良いメロディーに一目惚れならぬ一耳惚れしてしまったため、この曲を弾こうと決心しました。

ちなみに、300余りのフランス舞曲が収められたこの舞曲集の名である「テルプシコーレ」は、ギリシャ神話に登場する9人のミューズのうち、舞踏を司る女神である Terpsichore に由来するそうです。

なにはともあれお聴きください。もしよろしければ踊ってみてはいかがでしょうか？

メルト

サブカル業界をひとときわ賑わせたこの「メルト」という曲。今回の演奏会の中でもとくに新しいこの曲（2007年12月7日に初めて投稿された）は、恋する少女の気持ちを爽やかに描いた歌詞と、ピアノを前面に押し出したバンドサウンドが人気を呼んだ一曲です。不慮の事故で、この夏この曲に出会ってしまい、その美しい旋律に一（中略）耳惚れしてしまったため、あの日の感動を忘れないためにも勢いでこの曲を弾こうと決心しました。サブカルチャーだろうとメインカルチャーだろうと良いものは良い。本来ピアノ曲であるため、オリジナル曲にあるようなダイナミックなメロディーや、繊細な音色を奏でるのは難しいですが、オルガン独特の心地よさを表現しようと思います。はたして現代サブカルチャーとパイプオルガンという異色の組み合わせが実を結ぶか否か。

なにはともあれお聴きください。もしよろしければ歌ってみてはいかがでしょうか？

ピアノソナタ第8番 ハ短調 「悲愴」 第2楽章

ベートーヴェンの有名なピアノソナタからこれまた有名な楽章をひとつ、お届けします。

およそ激しい第一楽章と第三楽章の間に挟まれた穏やかでうたうようなこのアダージョには、ベートーヴェン個人の心境に迫った様々な解釈がありますが、私は一人の弾き手・聴き手としてただただこの主題とテンポにうっとりしてしまいますし、そういう楽しみ方もあっていいと思っています。実際に弾いていると、心が真白く平らになって今まで考えていたことを忘れてしまうほどです。

普段ピアノ演奏を耳にすることが多いであろうこの曲を、しっとりとした穏やかさはそのままに、オルガンの多層な響きで演奏してみようと思います。

前奏曲とフーガ イ短調

前奏曲は明快で力強く、フーガは絢爛な中にどこか寂しさを含んでいますが、いずれも 16 分音符による分散和音が印象的な佳曲です。

始めの前奏曲では、最初の 9 小節の間、一声のみで旋律が進行します（譜例 1）。10 小節目からは足鍵盤部にオルゲルプンクト（持続低音）が現われますが、上部の手鍵盤部は相変わらず単旋律で、オルゲルプンクトも 14 小節に渡って同じ音を鳴らすのみで旋律は奏でません。しかし、その中で、途中から 3 連符が登場し、更には時折 4 分音符をも組み合わせることで（譜例 2）、単調には聴こえず、むしろ多声的な響きすら感じられて来ます。バッハはヴァイオリン、チェロ、フルート等のために多くの優れた無伴奏曲を作りましたが、その力量がここでも発揮されていると謂えましょう。



譜例 1



譜例 2

長い単旋律で始まったこの曲も、やがて足鍵盤が旋律を奏でるようになり、手鍵盤でも声部が拡大され、線的だった音楽が和声的に展開されて行きます（譜例 3）。そしてその盛り上がりが頂点に達した後、その緊張が急速に収束して前奏曲が終わります（譜例 4）。



譜例 3



譜例 4

続くフーガは、力強い跳躍の後に下降を繰り返す旋律が主題で（譜例 5）、ゆっくりと、徐々に降りて行く音型の美しさが魅力です。この曲の元となったのが、クラヴィーアのためのフーガ イ短調 BWV944 で、こちらでも下降の美が存分に発揮されています（譜例 6）。



譜例 5



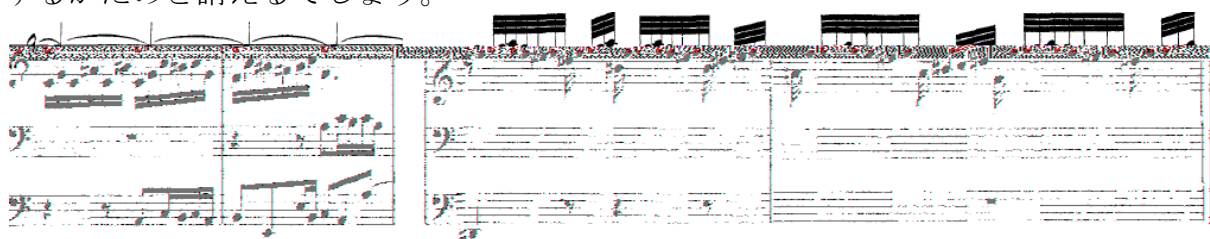


譜例 6

(A は BWV543、B は BWV944。いずれも、この 5 小節の中では、主題は中音域にありますが、高音部の旋律も特徴的な下降音型となっています)

全体の構成は 4 部形式になっています。まずは主題が提示され、それが次々と重なり合って大きく盛り上がります。それが一段落すると、手鍵盤のみの長い間奏が始まり、優美な下降音型が繰り返されます。やがて下降が上昇に転じて行き、そして、足鍵盤が再登場してトゥッティが始まり、急速に盛り上がって行きます (譜例 7)。盛り上がりの中で主題が勢いよく展開された後、前奏曲に回帰したかのように 32 分音符の単旋律が駆け抜け (譜例 8)、最後は短調の和音で劇的に終結します。

この曲にはリストによって編曲されたピアノ版があり、例えばファジル・サイやワイセンベルク等は、激しく強弱をつけて大変ロマンチックに弾いています。このように演奏することができるのも、そもそもドラマチックな展開を有するがためと謂えるでしょう。



譜例 7

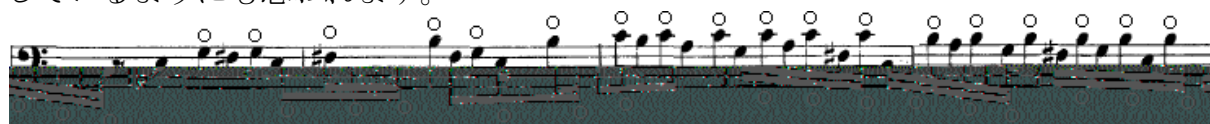
譜例 8

なお、このフーガで面白いのは、足鍵盤部分で主題を少し変更していることです。足で主旋律を奏でる部分では、両足をほぼ交互に用いばうまく弾けるようになっていますが (譜例 9)、手鍵盤での旋律 (譜例 5) と較べると 2 小節目で音が一つ少なくなっています。これは恐らく演奏上の理由で、もし厳密に主題を弾こうとすると、右図のように、跳躍部分で同じ足を連続させなくてはならず、大変弾きにくくなります。そのために、音を一つ省いたのではないのでしょうか。そして、一つ省くことによって、却って跳躍の力強さが増しているようにも思われます。



譜例 9

(下に丸印を付けた音符は左足、上に丸印を付けた音符は右足で弾く)



オルガン交響曲第1番 ニ短調 より 第6楽章「フィナーレ」

去年のヴィドールに続いて、19世紀から20世紀にかけて活躍したフランスの作曲家、ヴィエルヌの作品を演奏します。

ヴィエルヌは1870年生まれ。これはロマン派の作曲家から見ればかなり下の世代です。そして、ドビュッシーは8つ年上、ラヴェルは5つ年下。フランス印象主義音楽の代表2人の間に挟まれたオルガン奏者でした。フランク、サン＝サーンス、ヴィドール、ルソーといったオルガニスト兼作曲家から見ても、かなりの後輩になるわけです。ロマン派から近代への過渡期を生きた音楽家と言えます。そして、後年になると、モダニズムの潮流に敏感に反応し、作風もその方向へと向かってゆきます。

もっとも顕著なのは和声の拡大。今回の曲は1899年の作ということで、まだ大人しいですが、後期のヴィエルヌ作品は調性すら判然としなくなるほどの、無調性一步手前の和声感覚を発揮します。

また、19世紀後半に絵画に続いて起こった都市芸術、印象主義の影響と無縁ではありません。そこでは、近代都市の風景が描写され、同時に、田園や、自然すらも都会に立脚した視点で描かれます。古典や、遙か異国の風景も、通りから1本の路地に入り、1軒の店先に置いてあるかのように、作品に取り入れ、そして料理してゆく。

交響曲第1番もまた都会人の音楽ではないかと思います。スピーディーで、休むことのない動きは、機関車や、自動車の動力機関を想起させます。事実、モダニズムの作曲家は、そうした機械の運動を描写するのを好みました（L. オルンスタインの「飛行機の中での自殺」など）。楽想はフィナーレにふさわしい雄大なもので、まるで巨大な構造物が空中に浮かんでいるかのようです。量産された規則的なパターンが延々と繰り返されて平面を構成し、かつ熱気に満ちてどこまでも膨張してゆく、そんな近代を活写した、まさに近代音楽ではないでしょうか。

一方で、交響曲と題している通り（6楽章構成という特異な楽章の多さがありますが）、古典様式を強く意識しており、ソナタ形式が採用され、対位法操作による展開が好んで用いられています。

冒頭、無窮動音型の下で、ペダルによって力強くニ長調の第1主題が提示されます。それぞれの手が旋律や和声を奏でるのではなく、両手の動きの中から音型が浮かび上がるような手法が特徴的。無窮動音型は形を変えながらも、ほとんど止まることなく曲全体を通じて繰り返されることになります。第1主題がクライマックスを迎えた後に、穏やかな性格で対比的に登場するのがイ長調の第2主題。そして、その雰囲気のまま展開部に入ると、無窮動音型が主導する中を第1主題が変形され、刻々と転調します。テーマが延々と繰り出され、

繰り出されるごとにエネルギーを得て、変形無窮動音型による増5和音で遠隔調からニ長調に戻ると共に再現部に入ると、後は力を失うことなく、ひたすら猛進してゆくことになります。第2主題が力強く、躍動感を持って主音たるニ長調で現れ、これによって調性も解決されると、圧倒的な肯定感と共に主和音を奏して終わります。

自己紹介

平澤 歩 Hirasawa Ayumu

去年はBWV542を弾いて、今年はBWV543です（来年はBWV544でしょうか）。実は、今回の選曲は少し迷いました。大フーガ(BWV542)のような密度もなく、パッサカリヤ(BWV582)のように壮大でもなく、また、ホ短調のフーガ(BWV548)ほどの力強さもない。それでもこの曲を選んだのは、何よりもその旋律が佳いからです。そこで、今回の曲目紹介では譜例を多用してみました。ちょっと紙面を取り過ぎた気がします。旋律を示すだけなら「譜例5」のみで十分だったかもしれません。

人文社会系研究科博士課程1年

榊原 直樹 Sakakibara Naoki

大学1年生の時に入部して以来、今年で3度目の駒場祭になります。3年生ということで普段は本郷キャンパスに通っているのですが、オルガンの練習のためにと、こまめに駒場に足を運んでは練習を重ねてきました。今までと違って身近にオルガンがないせいか、オルガンの練習日が以前よりも貴重に思えるようになった気がします。身近にある時はさしてありがたみを感じなくとも、距離を置いて初めてその重要性がわかる、ということはよくあることですね。ではその空白を何で埋めているかというと、もっぱらiPodでオルガン曲を聴いて埋めています。バッハはもちろん、ヴィドールもデュリュフレも聴いています。ALI PROJECTも松任谷由実も聴いています（さて、どの曲に使われているでしょう？）そんな熱いオルガンへの思いが通じるかはわかりませんが、精一杯演奏しますので、お聞きください。

経済学部3年

高橋 彩 Takahashi Aya

オルガン同好会に顔を出すようになってから1年以上経ちました。練習時間がなかなか取れないのですが、塵も積もれば山となる、と言いますように、なんと今回はペダル使用曲に初挑戦です。と言っても、数か所の単音のみですが、900番のオルガンの音色を自分なりに精一杯引き出せば、と思っております。

教養学部前期課程理科一類2年

丸山 愛葉 Maruyama Yasuha

ずっとピアノを弾いてきたので、ピアノ曲をオルガンで弾くことが多いです。他の鍵盤楽器とは違う、パイプオルガンの音作り・表現の多様さにはいつも驚かされます。今日もそうした私の驚きも感じとっていただければと思います。

教養学部前期課程理科一類2年

芝原 俊樹 Shibahara Toshiki

小学生の時から電子オルガンを習い、その原点となったオルガンに興味を持ち同好会に参加するようになりました。両足を使う演奏に苦戦しなかなか上達しませんでした。900番教室に行き練習するたびにオルガンが好きになりました。表現力を磨きオルガンの魅力を伝えられるような演奏を目指していきたいと思います。

教養学部前期課程理科一類 2 年

金久保 祐介 Kanakubo Yûsuke

せっかくの祝日にわざわざお越しいただいて、どうもすみません。私のようなへなちょこ演奏でも楽しんでいただけたでしょうか。

楽しくありたい、自由でありたいというのが私のひとつの願いでありまして、今回の演奏会でも楽しく、自由にパフォーマンスをさせていただきました。ですが、皆さんにも自由に楽しい時間を過ごしていただかなくては意味がありません。単なる自己満足で終わってしまいます。

クラシック音楽が大好きな方にも、普段はあまりクラシックやオルガンには馴染みがないという方にも楽しんでいただけたならば、大成功です。

本当の「楽しい」は、本当の「自由」は、私ひとりでは作れませんからね。

教養学部前期課程理科三類 1 年

貝田 龍太 Kaida Ryûta と、編集後記

回を追うごとにバロック音楽の割合が減っているというのは一体どういうこと……。これも各メンバーの趣向の違いが反映された結果ですが、それにしても今回は、バロックの前のほう、バロック、古典派、ロマン派、近代、現代と、時代のバリエーションは過去最大級です。前回（第4回オルガン演奏会）、私はルーマニア民俗舞曲を弾きましたが、仮にこうした民族主義系の曲も用意していたとすると、1時間の演奏会で義務教育レベル？の音楽史を網羅できていたことになるという、なかなか珍しい事態なのです。

普段の練習では、ジャズを弾いてみたり、インターネットで見つけた気になる楽譜を持ち込んだり、エレクトーン譜（オルガンと同じ三段譜、ポピュラー曲多し）を使ったりといったことを度々行いますが、それらを演奏会に出そうと思うには、「これしかない！」という確信と、それを本当に実行してしまう勢いが必要なのです。一時の演奏会ではほぼ全プログラムを埋め尽くしたバッハを、わずか3曲に押し込めた実験精神、果たして吉と出るか。

今回は、今年の夏学期に開催した第4回オルガン演奏会の参加メンバー4名に、新人3名（なぜか全員理系）を加えての演奏会となります。独奏楽器ゆえ、人数が倍加したことで劇的に響きが変わる、なんてことはありませんが、演奏者が次々入れ替わって行くのも一興でしょう。

当同好会にとって、駒場祭演奏会はほぼ唯一の予定通り開催されるイベントです。周到な計画に基づいて高い完成度を目指すこともできるし、「まだ時間があるから」と、気楽に大曲に挑戦して危機的状況に陥ることもできますが、参加者全員がまさにこの当日、これだけはやっておきたい目標を達成している筈。「すごい」「素晴らしい」は中々に難しいけれど、「面白い」「これは流行る」と感じて頂けることを目標に、演奏したいと思います。

オルガン同好会では、教養学部オルガン委員会、その他大勢の方々のご支援を受け、駒場キャンパスの資源たるパイプオルガンに触れることができます。練習時間は、平日は概ね6時以降なので、とりわけ駒場の学生はオルガンを日常的に練習することが可能になります。休日には社会人の方も時折いらっしゃいます。同好会の活動に興味をもたれた方、事前連絡は不要です。当団体の練習時間をチェックして、気軽にお越し下さい。

教養学部前期課程理科一類 2 年

東京大学オルガン同好会

http://www.geocities.jp/organ_900/